

# 虚子記念文学館投句特選句

・令和六年一月

稲畑廣太郎 選

若水に張りついてゐる星の息

神奈川 進藤剛至

燦々と日の降り注ぎゐる冬芽

新潟 安原 葉

一瞬を重ねて滝の凍りけり

大阪 若林友子

真筆に佛を追ひ春を待つ

兵庫 英賀美千代

一枚の毛布送らうかと思ふ

岡山 石井宏幸

初空へ揺らす風音館の木々

兵庫 辻田あづき

左義長の祈りの炎能登は雨

神奈川 平野孤舟

初明り浴びて二人の未来かな

大阪 立入宮子

異次元のしじまはおどろ滝凍る

兵庫 西村みどり

シロフオンの音階不揃ひの氷柱

大阪 椋本望生

# 入選句・令和六年一月

凍滝に仰ぐ数多のカメラマン	三重	山中清茂	足よりも腕の雄弁スケーター	兵庫	武田優子
白一条音を抱きて滝凍つる	兵庫	前田容宏	虚子館へ踏み出す一步春隣	香川	真鍋孝子 (青少年)
咲ききらず色を閉ぢこめ冬さうび	奈良	山口廣世	句の神に一句授かる旅始	大阪	多田羅紀子
初夢や宇宙の星を拾ひたる	愛知	中野ひろみ	持ち寄りのお菓子配られ初句会	兵庫	高橋純子
スクラムにラガーの力凝縮す	三重	松村咲子	句座を待つ館に禮者となり侍る	鳥取	前田 千
濃し淡しリアスの緑初景色	三重	中島庸子	泣初やずつと手を振る見送りに	兵庫	深尾真理子
結婚の挨拶かねて年賀客	兵庫	宮本露子	ほろ酔うて独楽ひき戻す少年期	兵庫	永沢達明
大枯野尖りし星の降り止まず	大阪	ふじもと言果	駅よりの家路にゆとり日脚伸ぶ	兵庫	岸川佐江
ふる里の銘頼もしき年酒かな	兵庫	小柴智子	唇のますます薄く湯ざめかな	兵庫	吉村玲子
大寒の水に晒され京友禅	大阪	杉山千恵子	食積に倦みて櫃まぶし食べに	兵庫	槌橋眞美
花時計時を新たに年用意	兵庫	齊木富子	元旦の地震情報に友案じ	兵庫	辻 桂湖
三山の伝へ和める初景色	大阪	大橋明子	反橋を渡れば恵方その先に	大阪	北上美佐子
黙禱を捧げて仕事始かな	兵庫	高野さち	千年の古都を響かせ除夜の鐘	京都	西村やすし
つつつつ独楽果つるとき横滑り	兵庫	上岡あきら	三日過ぎても地震のこと友のこと	石川	辰巳葉流
初夢や忙しきほどに金拾ふ	大阪	勝山禮子	初春の館にあふるる師の笑顔	大阪	徳岡美祢子
ふる里の安らぎしみる雑煮かな	奈良	河村久美子	かるたとり先生の歌彷彿と	岡山	小幡恒雄
大地震大事故いくつ元旦に	兵庫	小川孝子	冬風や紀伊の山々雲と化す	兵庫	川村ひろみ
産土の神に若水賜りぬ	徳島	奥村 里	室の花師の写絵に癒さるる	大阪	奥野千草
シリウスの煌めき砕き若水に	兵庫	涌羅由美	体重計仕舞ひ込みたる三ヶ日	大阪	山田佳音
虚子館のステンドグラス初明り	香川	三宅久美子	この空の続きの雪を心配す	大阪	谷本房子
若水の日を透しなほ清みにけり	京都	木村直子	V戦士でラッピングの初電車	兵庫	森岡喜恵子
若井汲む水音止めばまた新た	香川	葛原由起	おはやうの形と形息白し	三重	池本準一
高難度技を競ひてスケーター	大阪	西尾浩子	虚子館は俳徒のまほら四温の戸	兵庫	玉手のり子
入館者十万人目淑気満つ	兵庫	奥田好子	幽明をつなぐ虚子館寒に入る	兵庫	黒田千賀子
スケートや銀の鬨気の舞ひにけり	兵庫	山田翔太	寒紅の口八丁は衰へず	大阪	室田妙子
若水や厨の窓に残る星	兵庫	中村恵美	師を慕ふけふ冬桜満開に	大阪	田邊育子

思ひ出の息づく館へ春著著て	兵庫	清瀬 環	水仙の香は風の意に逆らはず	兵庫	金田八江子
映し絵の汀子師燦と寒晴るる	兵庫	小林智子	明日へとつなぐ希望や寒夕焼	大阪	永井ひろ子
初句会母子で来れしことの幸	大阪	多田羅初美	冴ゆる能登早く復興祈るのみ	兵庫	山口弘子
嘆くなの言葉力に寒に耐ゆ	兵庫	山之口倫子	午前二時肌切る風と冴ゆる月	兵庫	道中義臣
小春日の生誕祭の盛大に	大阪	徳永由起子	帰路急ぐ古都の街角鐘冴ゆる	兵庫	入谷千恵子
未来へと望みあため初暦	大阪	林 曜子	大地震や重なるあの日寒の雨	兵庫	伊藤秀子
師のことはいつもわが胸寒椿	兵庫	勝田展子	不機嫌も治る薬か玉子酒	兵庫	惠島祥一朗
松飾掛けてママちやり疾走す	兵庫	岩鼻絹子	登り終へ岩場の上の日向ほこ	兵庫	福田光博
寒菊を捧げ鎮魂句碑の今朝	兵庫	田村惠津子	冬青空冥王星を孕みけり	兵庫	月あんぬ
日脚伸ぶ虚子の金庫の奥にまで	兵庫	藤井啓子	風邪をひき逞しくなる子の面	熊本	貴田雄介
お降りや正座のままに眠る母	大阪	押見げげげ	雨粒の光る浅沓どんど燃ゆ	愛媛	星月彩也華
冬川に翡翠の玉のありにけり	三重	水越晴子	東雲の原野に白し鶴の息	愛知	小野 薫
能登地震句友を案じ悴める	兵庫	池田雅かず	風葬におむすびほどの雪達磨	滋賀	近江堇花
訪れを待つ他は無き雪間かな	愛知	海神瑠珂	午後五時の終業のベル日脚伸ぶ	石川	辰巳昌彦
どんどの火疫病神も退散す	京都	杉森大介	真冬日の物干竿に架かる風	和歌山	中島紀生
白龍の氷を撫でる孤高かな	静岡	いたまき忠	春隣花でも買ってみませうか	兵庫	岩水ひとみ
葉陰より顔の覗ける冬堇	奈良	堀ノ内和夫	一月の今帰仁に咲く石露の花	神奈川	斉藤苑子
日の色の黄色集めて福寿草	兵庫	足立朱麻	年の火に踊る人影行儀よし	神奈川	小林 心
黙禱を終えて鈴振る初神楽	奈良	豚々舎休庵	五時四十六分あの日と同じ寒き朝	東京	宮村土々
疎ましき寒九の雨や地震の能登	石川	伊東弥太郎	水仙や背筋を伸ばし寺まゐり	兵庫	伊集院秀樹
日脚伸ぶ九九を唱へる下校の児	兵庫	高市敦之	薬喰死んでもええわもう喰へん	兵庫	阿曾宏之
葉がくれを夕日の晒す竜の玉	大阪	石橋玲子	注連縄に雀集れる武家屋敷	兵庫	太平楽太郎
水仙や星と話してゐる岬	兵庫	大西美知子	投げ入れるたびの狂炎どんど焼き	神奈川	金子三奈乃
水仙や辺りの草木動き出す	兵庫	山岸正子	牡蠣船や強くはあらぬ酒の酔ひ	兵庫	キートスばんじょうし
咲き揃ふ崖の起伏に野水仙	大阪	辻 昌子			
冴ゆる夜に屋台の笛の遠きまま	兵庫	長谷川敬子			
音たてる赤いヒールに冴ゆる闇	兵庫	雲山ひまり			